

この「広報ひこね」は48,350部作成し、1部当たりの単価は8円(1円未満切り捨て)です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

▶百々村周辺地図



連載企画 「わたしの町の戦国 第5回」  
百々氏と百々館

百々氏は、伊予国(愛媛県)河野氏の一族である河野盛道が、応仁の乱(1467~77)の戦功で京極持清から小野荘を与えられて、百々内蔵助を名乗ったのが始まりと伝えます。以後、百々氏は小野荘百々村の百々館に居住し、国人・土豪などと呼ばれる村の指導者として生活していました。

一方、近江の地が、江北の京極氏と江南の六角氏、京極氏の被官(家臣)から台頭した浅井氏によって、文字どおり三つ巴の争いを繰

り返す中で、百々氏もこれらの戦国大名の配下に組み込まれ、時に応じて京極氏・六角氏・浅井氏に属しながら戦いました。

この間、3者の戦国大名にとって境目の城として重きを成したのが佐和山城でした。佐和山城は軍事拠点として臨時に利用されたため特定の城主が置かれず、そのため山下に本拠のある百々氏がしばしば佐和山城を預かって、城代を務めました。百々氏の佐和山城代は、永禄4年(1561)の六角承禎による佐和山城攻略により、浅井方の城代であった百々隠岐守が自決したのが最後となりました。

浅井長政は、すぐさま佐和山城を奪い返し、長政の重臣であった磯野員昌を据えています。磯野員昌は城代ではなく城主として居城しました。その期間は、織田信長に降伏して佐和山城を開城する元龜2年(1571)までの10年間におよびました。佐和山城は、これまでの臨時の軍事拠点から、日常的な政治・経済の拠点となる新たな時代を迎えたのです。

百々隠岐守を失った百々氏は、その後、百々越前守が信長、次い

で秀吉に仕えており、一族の中には江戸時代に入って井伊家に仕え、大坂の陣で活躍した人物もいたようです。

百々氏が代々の地とした百々村は、旧鳥居本宿の南端、中山道と彦根道(朝鮮人街道)が合流する辺りに存在しました。百々氏の居館である百々館は、百々村の西方に存在したと推定されています。周囲に堀を巡らせた方形の平地城館であったと考えられますが、現在はその姿を見ることができません。発掘調査を実施したこともありますが、往時の痕跡は確認できませんでした。

百々氏の菩提寺は、百々村の東、新幹線を潜り、迫りくる山の尾根上に存在した天台宗百々山本照寺でした。「本照寺殿」は百々家初代内蔵助(河野盛道)の法名でもありました。本照寺は元龜元年(1570)から翌年の佐和山合戦の際、兵火により焼失。兵火を逃れた本尊阿弥如来像は、後に本照寺別院の梅本坊によって奥の院に隠され、境内には八幡宮が建立されました。大正8年、阿弥如来像は近くの山田神社に合祀され、八幡宮は阿弥陀堂として地域の人々の手で守られています。

なお、百々山本照寺の一筋南の

▶百々氏歴代の菩提寺と伝える百々山本照寺の阿弥陀堂



尾根頂部には、丸山城跡があります。百々氏が戦の折に用いた詰城との説もありますが、城跡の調査では構造が急激的であり、臨時の構築が想定されることから、佐和山合戦で佐和山城を包囲した織田方の丹羽長秀が築いた陣城ではなかったかと推定されています。

問い合わせ先 困教育委員会文化財課 ☎26-58033番、FAX 26-58099番、Eメール: [bunkazai@mx.hikone.ed.jp](mailto:bunkazai@mx.hikone.ed.jp)

